

マハートマ・ガンディーの近代文明批判と 3.11 以降の日本

宇野彩子

1. ガンディーと出会っているか？

2014年11月29日と30日に開かれたシンポジウム「アジア研究のいま——思想・歴史・言語」において、私は二日目の最後に発表したので、二日間にわたる先生方の多彩な、興味深い発表と質疑応答をじっくり聞いた上で話すことになった。特に私にとって深く心に残ったのは、小泉仰先生の発言にあった「イエスに出会うこと」であった。中村敬宇がキリスト教から離れていったのは「イエス・キリストに出会うことができなかったこと」と関連していると小泉先生は指摘され、さらに、「イエスに出会うこと」を求めて続けてこられたご自身の努力について言及されたのを聞いて、研究テーマがご自分の生きることと深く関わっている小泉先生の真摯な学問的姿勢に、自分自身を深く反省させられた。

かくして私の研究発表は「いったい私はガンディーと出会っているだろうか？」という問いから始めた。それはある意味で奇妙な問いかけと思われたかも知れない。「インド独立の父」と呼ばれたマハートマ・ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi) は1869年にインド西北部にあるグジャラート州のポールバンダールに生まれ、1948年1月30日に独立直後のインドの首都デリーで暗殺されたのであるから、私が生まれる何年も前に亡くなっているが、小泉先生が「イエスに出会う」ということについて話されたように、もちろん歴史的に同時代の人としての出会いではない。

1994年にインドでのガンディー生誕125年の記念行事に参加した時に私は生前のガンディーを知る人々の話を聞いたが、中には自分の話の端々に「ガンディーさんはあの時こう言った、この時こう言った」などガンディーの言葉をしょっちゅう紹介していても、場合によってはガンディーの発言を自分自身の権威づけの道具に使っているのではないかと疑問に感じることもあった。むしろ、いわゆる「ガンディー主義者」ではない人たちに、誠実にガンディーのメッセージを生きようとしている人たちがいるように思えた。それから何年も経って私も大学などでガンディーについて話しているが、若い時に生意気にも批判した人たちと同じようにガンディーを自分の都合の良い「道具」にしてはいないだろうか？

いったい私は自分の研究テーマであるガンディーと日々出会っているだろうか？ ガン

ディーと出会うということは、説明や知識や情報のレベルでガンディーを知るということではなく、私自身が日々新しく生かされて、対話を重ね、共に生きる・生かされるということが必要ではないか。単なる知的好奇心や自己満足に終わるのではなく、研究テーマと日々格闘し、その中から自分自身も生きる力を得て、いかに微々たるものであってもそれを周囲と分かち合うことこそが大切ではないだろうか。今回のシンポジウムのおかげで私は遅々とした自分の歩みを振り返り、そもそも学ぶことの原点として、出会いと対話は切り離すことができないということあらためて感謝と共に意識した。

小泉先生の投げかけた問いは私の心に、まるで池の水面に石を投げたときにできる小波が広がっていくように響き続けた。ガンディーに直接会うことはかなわなかったけれど、(そもそも、たとえ同じ時代に同じ場所にいても目の前の人と本当に出会っているかどうかはまた別の問題だが) 今まさに生きてメッセージを発している存在としてのガンディーと対話を重ね、共に生きることなくして、ガンディーの一番大切なメッセージを理解できない。だからこそ、今回の研究発表タイトルに「3.11以降の日本」と入れたのではあるが、まだ自分のこととして、他人事ではなく、自分自身の生きること、学ぶことと本当に関わっているだろうか？ こうした反省から始めた発表であったため、大変未完成で中途半端なものとなった。

2. ガンディーとは誰か

マハトマ・ガンディーはイギリス支配下のインドにおいて非暴力不服従運動を展開し、インドを独立に導いた指導者としてあまりにも有名である。「マハトマ」とはインドの人々がガンディーに与えた敬称であり、「偉大な魂」という意味である。

現代のインドにはガンディーの肖像や銅像はあちこちで見られ、ガンディーの名前は道路や建物の名前にも使われている。そして簡素な生活を送り、最も貧しい民衆と共に生きることを課題としていたガンディーの生き方からは大変皮肉に思われることだが、インドのルピー紙幣にはガンディーの肖像画がついている。このようにガンディーの名前や肖像はインドではごく日常的であるが、しかしガンディーの生涯をかけたメッセージは現代インドにおいて受け継がれているであろうか？

インドが200年にわたる英国植民地支配という重い軛からようやく解放されるというまさにその時に、コミュニズム (Communalism 宗教の名の下での対立、暴動)¹⁾の深刻化が決定的となり、ムスリム (イスラーム教徒) のための国家を掲げるパキスタンと、世俗主義を掲げるインドに分離されて独立した。これを分離独立 (Partition、1947年) と言い、今日まで続くインドとパキスタンの対立の原因となる多くの悲惨や悲劇を伴った。²⁾

このただ中で最晩年のガンディーは悲願を徹底的に打ち砕かれ、孤独な歩みを強いられていた。³⁾ 分離はインドという一つの生きている身体をバラバラにし死に至らしめると、命がけで反対し続けたガンディーは無視され、ガンディーの悲願であった様々な多様性を

包括した一つのインドのスワラージ (*Swaraj*、自治・自立・自由) の実現は阻まれた。ガンディーはコミュニズムの嵐の中を村から村へと和解と再生を訴えて歩き、新たに引かれた国境線近郊から大量に押し寄せた難民によって激しい宗教的緊張が高まっていた首都デリーで断食を行って平静を取り戻し、その直後に同胞であるヒンドゥー教徒によって暗殺された。ガンディーの暗殺者はインドが強力な近代国家となるために阻害要因となるガンディーを亡き者にしたと述べた。⁴⁾

その死の直前にガンディーが最後の「遺言」として作成した新生インドへの提案は、新しいインド政府の指導者たちからは全く無視されたが⁵⁾、同様に、ガンディーは現代インドでは「インド独立の父」という歴史的人物として注意深く敬意を払われているが、新しい独立国家としてのインドの歩みにおいてはガンディーのメッセージは葬り去られている。⁶⁾しかしインドでは草の根の運動において、例えば平和運動や環境保護運動において、ガンディー思想は息の長い活動の支えとなっている。⁷⁾さらに注目すべきことは、ガンディーのメッセージはインド一国をこえて、アメリカ公民権運動の M. L. キング Jr. 牧師やチベット仏教の指導者ダライ・ラマ 14 世、南アフリカのネルソン・マンデラ氏などに見られるように、国や宗教の違いを超えて平和を求める人々の支えとなってきたことは重要な事実である。⁸⁾ガンディーこそが現代世界において徹底的に踏みにじられ、絶望的な立場におかれている人々にとって「闇の中の光」、「正気の声」であるという指摘は重く受けとめられるべきであろう。⁹⁾

3. ガンディーからの問いかけ——真理実験の物語

ガンディーのメッセージとはどのようなものであろうか？ ガンディーは生前「あなたのメッセージは何ですか？」と聞かれたときに「私の生涯が私のメッセージです。(My life is my message.)」と答えたという。¹⁰⁾

その生涯をかけた目標は、ガンディーの自叙伝の「はしがき」によると、「過去三十年間ひたすら…自己の完成、神にまみえること、人間解脱モクシャ (*Moksa*、解脱・救済、自由) に達すること」である。¹¹⁾これは三つの異なる目標ではなくて、ただ一つの目標であり、その目標へ向かって自分の全存在をかけてきたと述べている。すなわち、「自己の完成」とは神にまみえることであり、それこそが真の自由、解放であるということであり、そのイメージは巡礼者である。¹²⁾

ガンディーはこの目標に向かっての歩みを自叙伝として書くにあたって副題をつけたがそれは「真理実験の物語 (*The Story of My Experiments with Truth*)」であった。それは日常的生活のあらゆる営みを通して一心に真理 (*Satya*、サッティヤ) を求めて生きることを実験とガンディーはとらえているからであった。その実験の結果、明らかになったこと、すなわち、自叙伝を通して証言したかったことは、真理こそが神であり、真理に至る唯一の道すじは非暴力、愛 (*Ahimsa*, non-violence) によるということだと自叙伝の「別れの辞」に

述べている。¹³⁾

この目標に向かって自覚的にひたすら歩み始めたきっかけはどこにあるのだろうか？自叙伝の「はしがき」が書かれた時代から約30年遡ってみると、1893年に南アフリカで受けた人種差別的暴力の出来事であったと思われる。¹⁴⁾ ガンディー自身この出来事を「人生における最も創造的な経験(The most creative experience of my life)」と語ったという。それはガンディーにとって「二回目の誕生」であり、回心、すなわち心を神に向けるという経験であった。¹⁵⁾

ガンディーはイギリスに留学して弁護士の資格を得たが、インドに帰国して弁護士として活動を始めたところ極端なまでに内気な性格が災いして人前で発言できず、弁護士として失敗し行きづまっていた。そのような苦境に立っていた時に南アフリカで成功していた同郷のインド人貿易商からの依頼を受け、訴訟事件の手伝いをする事務員として一年間の契約で南アフリカへと赴いた。そして南アフリカに到着してわずか一週間ほど経ったときにこの出来事に遭遇した。ガンディーが港町から内陸の赴任地へ赴くために汽車の一等席に坐っていたところ、有色人種だからということで貨物車への移動を命じられ、移動を拒否したところ駅で汽車から荷物もろとも放り出されたのだった。ガンディーにとって初めての人種差別の経験だった。

夜の暗い待合室で、寒さに震えながら、一晩中ガンディーは、自分はどうすべきかを考えた。依頼された仕事を放り出して帰国するか、帰国しないとしたら、屈辱を無視して仕事を続けるか、屈辱に対して闘うか。自分の義務は何か。考えに考え続けてようやく出した答が、この事件は人種差別という病によって引き起こされたものだから、この病を根絶するために闘おう、そのために自分自身にこうむる困難は耐えようという決意だった。¹⁶⁾

このときの出来事、誰一人味方もいない未知の場所の暗い闇の中で、寒さと恐れに震えながら、一人きりで考えた経験はいったいどのようなものだったのだろうか。これまで自分が頼っていた常識や法的制度や正義などのさまざまな外壁が打ち壊されて、自らの非力さに打たれ、ただひたすら助けを求め、自分自身の深い奥底に眠っている声に必死に耳を傾けるという経験だったのではないだろうか。南アフリカがこんな恐ろしい国だとは知らなかった、帰ろう、という声もあったかもしれないし、この国で生計を立てて行くにはこうした屈辱は避けがたいものとしてあきらめるべきだという声もあったかもしれない。しかし自分自身の内なる声との対話を重ねた末に、ガンディーはこの経験から逃げないで闘おうと決意するにいたったのだった。その経験は「私は誰であるのか Who am I?」という伝統的なヒンドゥー教の出発点としての問いかけであり、そこから「私は今何をすべきか?」、「私の義務は何か?」と一歩一歩自問して心の奥底からの招きに応える決意を生みだし、この出発点から生涯をかけた闘いが始まった。後年ガンディー自身が自分の生涯を振り返ったときにこの出来事が決定的なターニングポイントであり、真理・神への自覚的な歩みの出発点として意識されたのだった。¹⁷⁾

そしてガンディーはこの決意によってそれまで経験したことのない内なる力を自覚し、恐れを乗り越えた。このときの旅を終えて目的地に到着したガンディーはインド人集会で自分自身の意見を落ちついて述べることができ、まるで別人のようであった。¹⁸⁾そしてガンディーはこのときの決意を守り、その後約20年にわたって南アフリカにおいて人種差別との闘いを続け、その結果大きな自己変革を遂げた。その歩みは真理への信仰に支えられての闘いの歩みであり、最大の戦場は自分自身であり、生活のあらゆる面での実験を行う過程で自分自身も、家族も、共同体も、大きく変化したのだった。¹⁹⁾南アフリカを去るときに、ガンディーは「奉仕者」としての召命を明らかにしてくれた南アフリカへの深い感謝の念にうたれている。²⁰⁾

ガンディーは自叙伝において、一人の人間に可能なことは万人に可能であると述べ、読者が自分自身のおかれた場において真理実験を行うことへと招いている。²¹⁾サッティヤへの一歩は自分自身の内なる真心に耳を傾けることであり、アヒムサとは命を与えられながら、真理から遠く離れている自分自身を振り返り、大いなる慈悲にうたれ、日々感謝して生きることである。それをガンディーは「One step is enough」という生き方として生涯をかけて証言した。²²⁾この招きに応えることは現代世界に生まれ育った私たちにとっていったいどういう意味を持っているだろうか？

4. ガンディーの近代文明批判

南アフリカにおけるガンディーの歩みは、自分自身と、また家族と、インド人コミュニティーの様々な立場の異なる人々との真摯な対話を基盤としていた。その歩みは声なき声に耳を傾けるというものであった。そしてその対話は、白人の優越を文明論的に主張し、人種差別を正当化し、インド人たちに不当な攻撃を行う南アフリカの政府や白人社会とも続けられた。その過程で、不思議なことに、ガンディーと深い友情を結び、その実験を献身的に支える白人たちも見いだしたのだった。²³⁾

ガンディーの南アフリカでの人種差別に反対する運動は、まずは新聞への投書や請願書を通して、白人社会の理性に訴える形で展開した。同時にインド人社会に自分たちの慣習や衛生観念などの改善を働きかけ、インド人がより良い社会の一員となる努力を実践した。ボーア戦争(1899-1902)の際、ガンディーは看護隊を組織し、命がけでイギリス側を支援した。そこで前提となっていたのはヨーロッパ人社会や大英帝国への信頼であった。

しかし約10年間の地道な活動にも関わらず、人種差別的制度がますます厳しく容赦なくインド人社会を追い詰めていき、もはや南アフリカで人間としての誇りを守ることが困難になったときに、新しい運動が誕生した。それはサッティヤグラハ運動であり、神の御前に正しく生きることを誓い、そのために現存の法と秩序を拒否しなければならないときには、その行為によって与えられる苦難や処罰は自分たちが引き受けてでも現状の問題点を明らかにする。相手を攻撃するのではなく、相手の良心に訴え、変革の実現を求めるものである。²⁴⁾

サッティヤグラハは非暴力による変革の方法であり、それはガンディーにとっては生活のあらゆる状況の中で日々実践される真理実験であった。

南アフリカでの苦闘を通してますますガンディーにとって明らかになったのは、人種差別を正当化し、インド人を搾取して成り立っている南アフリカの政治や経済は、世界全体を支配しようとしている近代文明と一体であり、近代文明は神に向かっての歩みを否定するということだった。特に1909年にガンディーは『ヒンド・スワラージ、インドの自治』で徹底的な近代文明批判を展開している。²⁵⁾

残念ながらこの著書の書かれた背景などについては詳しく紹介できない²⁶⁾が、焦点を絞って、ガンディーの近代文明批判のエッセンスを検討する。19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリスの支配下からのインドの自由(スワラージ)を求める運動が広がっていたが、様々な立場の相違を越えてその運動はナショナリズムという形で展開するようになっていた。しかしそのナショナリズム自体が近代的な枠組みであり、ナショナリズムの担い手たちの多くは植民地支配からの脱却を目指す、近代文明や近代化は受容するという立場であった。それに対しガンディーが南アフリカでの経験からはっきりと自覚するにいたったのは、インドの悲惨は近代文明によって踏みにじられているということであった。²⁷⁾

ガンディーは『ヒンド・スワラージ、インドの自治』において、インドの状態について、「それを語りながら、私の目には涙が溢れ、喉は渇いてしまいます。」²⁸⁾と深い悲しみと嘆きをもって次のように述べている。

インドはイギリス人ではなく、近代文明に踏みにじられているのです。インドは近代文明に捕らわれてしまっているのです。そこから逃れる方法はまだたしかにあるのですが、日々、時は過ぎ去っています。私には宗教が大切ですから、まず悲しいことはインドが宗教から外れて行くことです。私は宗教をヒンドゥー教とイスラーム教とかパルスィー教とは解釈していません。しかしすべての宗教にある宗教が失われようとしているのです。私たちは神から顔を背けるようになっていきます。²⁹⁾

しかし、ガンディーはイギリス人を責めるのではない。むしろ憐れむべきだと述べている。イギリスの状況は惨憺たるものであり、イギリスの誇る「文明」とは「人間たちが物質的追求と身体的安楽を有意義であり人生の目的としている」のであり、「文明のしるし」とは武器、機械技術、医学などである³⁰⁾。これらの指摘はまさに現代世界について妥当な見解ではないだろうか。近代文明の中で生まれ育ち教育を受け、その恩恵をこうもって生きてきた我々にとっては、この近代文明のどこが問題なのかわからないかもしれない。

しかしガンディーの立場から見ると、「(近代)文明には道徳や宗教はありません。…身体がどのように楽できるか文明は与えようと努めています。それにも関わらず、その安楽は

ありえないのです。…この文明は不道徳です。」³¹⁾と激しく批判されるべきものであった。

ガンディーの理解によると、インドが英国の支配下にあるのは「インドをイギリス人が取ったのではなくて、私たちがインドをイギリス人に与えたのです。…私たちがイギリス人をいさせたのです。」³²⁾

イギリス人たちの最高神はお金である、このことに留意すると全てがはっきりとします。…私たちがイギリス人をインドに置いているのは、ただ利己心のためです。私たちはイギリス人たちの商売が気に入っているのです。…それに私たちはたがいに争ってイギリス人たちにさらに力を与えているのです。³³⁾

近代文明によって押しつぶされて支配され破壊されつつあるがインドには真の文明がある、そこに一刻も早くインド人たちが自身が立ち戻ることが緊急の課題であるとガンディーは述べている。では真の文明とは何か。

文明とは、人間が自分の義務を果たす行動様式です。義務を果たすことは道徳を守ることです。道徳を守るとは、私たちの心と感覚器官を統御することです。このようにして、私たちは私たち自身を認識するのです。³⁴⁾

真の文明において、義務を果たすこと、心と感覚を統御し、道徳を守るとはすべて神への歩みであり、それを促すのが真の文明の働きである。このこと的前提には、ヒンドゥー教の伝統的な出発点としての問い「私は誰か？」という問いに生きることこそが不可欠であるというガンディーの理解があると思われる。真の文明においては、「私たちは私たち自身を知る」ことこそが正しい行いである。「これはまさに、「よい（ス）」、つまり、よい行為（スダーロ）なのです。ですから反意語は、悪い行為（クダーロ）です。」とガンディーは述べている。³⁵⁾近代文明においては「私は誰か」の問い自体が見失われ、忘れる方向にあることから不道徳的と批判されている。

インド文明の傾向は道徳を強化する方にあり、西洋文明は不道徳を強化する方にあります。ですから西洋文明を非文明（クダーロ）といいなさい。西洋文明は無神論であり、インド文明は有神論です。³⁶⁾

インド人たちが近代文明を受容し、自分たちから良いものだと思っていて火に飛び込んで破滅に向かっている³⁷⁾、神から顔を背けるようになっていく³⁸⁾というガンディーの深い悲嘆の叫びは現代日本に生きる私たちにとってどのような意味があるだろうか？

5. 3.11 によって明らかにされた現代日本の闇

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、現代世界の最先端を走る経済大国日本において近代的技術に支えられた生活の恩恵を当然のように享受して安穩と暮らしていた多くの日本人に、大きな悲しみと苦しみを与え、生活の基盤を奪われ、目を覚ますべきときが来たという警鐘となったのではないだろうか。大地震や巨大な津波はライフラインの脆弱さを露呈し、深刻な原発事故は私たちの安全や生存そのものの基盤を揺るがした。このような危機的状況にも関わらず、政治家や経済界や科学者たちによる無責任な言動に呆然とした。さらに自分たちの生活があまりにも多くの大きな犠牲の上に立っていることに気がつき、自己反省をもって生活を変えようという動きが広がったように見られた。

グローバル化経済からの方向転換を目指した農業、原発依存のエネルギー政策への批判、憲法九条を基礎とした日本の平和主義を守る運動、手作り手作業を重視した生活の実践と啓蒙活動、新しい形のコミュニティー作り、非暴力的な自然保護運動など、こうした運動のなかにガンディー思想に学ぼうという動きは3.11以前から見られた。例えば「懐かしい未来 (Ancient Futures)」(NPO 法人) の提供するインターネット上の貴重な場にはこうした様々な動きがゆるやかに繋がっている様子を見ることができた。³⁹⁾ こうした消費拡大的なグローバル経済への批判的運動は、東日本大震災が現状のシステムがいかに傲慢で、多くの犠牲の上に成り立っているかを明らかにしたことを契機として、一般市民に自分たちの生活様式への反省を促し、賛同を集め、最近より活発化しているようにも見られる。

また、3.11以降の日本で、震災によって家族など愛する人々やふるさと失い、悲しみ苦しみに打ちのめされた人々にガンディーの言葉と生涯を通して慰めと励ましを与えようという意図があると見られるガンディー関連の出版物がいくつも出ている。⁴⁰⁾

しかし、それにも関わらず、現代日本は方向転換を拒否している。近代文明の道は行きづまり、自滅の道を走っているということは忘れ去られている。あまりにもどっぴりと近代文明にひたって生きている私たちにとって現状打破の道は見えてこない。大震災から4年経っても復興への道のりが見えない被災地の状況は他の地域の住人からは次第に忘れられ、原発事故についても、世界に対し「アンダーコントロール」と首相が表明し、政府をあげて一日も早く原発を再稼働する方向を強めている中で、私たちの多くは痛みや恐れを忘れる方向に身を置いている。あれだけ多くの犠牲を伴って警告を与えられていながら、私たちは安易に耳に心地よい言葉を頼りにし、すでに元の木阿弥ではないだろうか。この私たちの鈍感さ、無関心を生み出している心の習慣こそが近代文明の病のしるし、闇であると思う。

6. たった一人の闘い——「牛飼い」の物語と「私は誰であるか？」の問い

今回この問題をシンポジウムで共に考えるために準備する過程で、ある絵本に出会った。この絵本とは『希望の牧場』である。⁴¹⁾ そこで語られるのは牧場の「牛飼い」である主人

公が「あたりまえ」の仕事として牛を大事に育ててきたが、大震災後の原発事故による放射能汚染（原発から20キロメートル以内のエリアにあるため、まず退避命令を拒否しなければ牛の世話を続けられなかった）によって、牛を出荷できなくなったばかりでなく、政府からの通達によって牛を殺すことを命じられ、その命令を断固として拒否するという衝撃的な物語である。

主人公は毎日何回ものように「自分は牛飼いだから」と一人自問自答している。牛飼いだから、牛が生きていることを世話する、それが当たり前のことである。しかし、大震災後の原発事故はその当たり前を覆してしまった。牛飼いは、牛を殺す人になってしまったのである。それこそ闇である。それを断固として拒否する主人公は勝ち目のない絶望的な闘いにありながらも、力強い。

ここで逆説的に明らかにされたのは、近代文明においては牛飼いの飼っている牛は売れるもの、商品としての牛である。そして放射能に汚染された牛は商品としての価値はなく、もはや生かしておく意味がなくなって、殺すしかない、という言説が正しいものとして現代日本でまかり通っている。その現状に対してたった一人で「ノー」と言って主人公は闘っている。政府や周囲からの想像を絶する圧力にも屈せず、売れない牛と共に生きている。その主人公の姿に共感したのか次第に協力者が集まってきて、いつしかその牧場は絶望のただ中でありながら「希望の牧場」という名前でも知られるようになったのである。

この絵本を紹介することを通して共に受けとめたかったのは、ガンディーが徹底的に批判している近代文明のただ中で私たちは安穏として生きているが、私たちがいくら問題は解決にむかっていると幻想を抱こうとしても、実は私たちがおかれているのはこの主人公と同じ絶望的な闘いの中であるということである。そしてそこで周囲の理解は得られず社会的価値を与えられないにもかかわらず、時には権力などに強制されることを断固として拒否しながら、いのちの重さと共に生きることは孤独な闘いの日々である。

売れない牛を生かしつづける。

意味がないかな。ばかみたいかな。

いっばい考えたよ。

「オレ、牛飼いだからさ」

あたりまえみたいにいいながら、

そのあたりまえのことを、まいにちいっしょうけんめい、勝ちとってる。⁴²⁾

このように主人公は淡々と語っている。この闘いの中での唯一の支えは、私は誰であるか、そしてどのように生きるのが正しいのか、という終わりのない問いである。問いかけすることを断念し、政府に命じられたように牛を殺すことは、それはすなわち自分自身を殺すことである。

絵本の最後に主人公は毎日の自問自答の末、牛たちと共に生きることを決めて次のように牛たちに語りかける。

あしたもエサをやるからな。もりもり食って、クソたれろ。
えんりよはいらねえ。おまえら、牛なんだから。
オレは牛飼いだから、エサをやる。
きめたんだ。おまえらとここにいる。
意味があっても、なくてもな。⁴³⁾

この最後のページの絵は主人公が冷たい雪が降っている中、彼を待っている牛たちに向かって一人歩いて行く後ろ姿である。そのまっすぐな背中では自分のすべきことをするという強い決意と、冷たい雪にも関わらず牛と主人公を生かしている暖かい力を伝えている。⁴⁴⁾

7. まとめにかえて——『希望の牧場』における希望

ガンディーは生涯をかけた真理実験の物語のなかで、真理に至る唯一の道は非暴力であり、その道を歩むためには自己浄化が不可欠であり、自分自身を無（ゼロ）にする徹底的な謙虚さが必要であると述べている。⁴⁵⁾『ヒンド・スワラージ』の中でガンディーと対話する若者（読者）は、このような働きの歴史的証拠を示して欲しいと要請した。それに対しガンディーは次のように述べている。

詩人トゥルシー・ダース⁴⁶⁾は歌っています。

「慈悲は宗教の根源
罪の根源は傲慢
トゥルシーはいう
身体に命がある限り
慈悲を捨てないように」

私にはこのことばが公理のように思えます。…慈悲の力は魂の力、サッティヤークラハです。そして、この力の証拠はいたるところに見られます。その力がなかったとしたら、地上は地底にいつてしまったことでしょう。

世界にまだこれほど多くの人間がいることは、世界の基礎は武器ではなく、真理、慈悲、つまり魂の力であることを伝えています。ですから、歴史的に強力な証拠は、世界が多くの戦争や争乱にもかかわらず生き続けていることです。ですから戦争の力よりもほかの力が世界の基礎なのです。⁴⁷⁾

人類が長い歴史をもって生き続けていること、それ自体がこの真理、慈悲、魂の力の働き

によっている証拠であるとガンディーは述べている。あまりにも当たり前すぎて私たちはその働きを見ることすらできない。私たちの生き方自体がその働きを押しつぶしてきているというガンディーの指摘に耳を傾けることができないでいる。『希望の牧場』で明らかにされたように、牛飼いに牛を殺すことを命じてそれを疑問に思うことすらできない現代日本の状況を見ると、ガンディーの指摘した近代文明は「不道徳」であるという批判が重たい意味をもって迫ってくるのではないだろうか。

こうした反省に立ち、私たちアジア研究に携わるものは、近代文明によって徹底的に押しつぶされた真の文明に学ぶことを緊急の課題として意識しなければならない。まずは自分自身の内なる声、そして近代文明によって踏みにじられている目の前のいのちの声に耳を傾けなければならない。『希望の牧場』の主人公が現代社会の中で意味を失った牛と共に生きることを決めたように、そこには日々の葛藤があり、安易な「正解」はない。牛の命のかけがえのなさ、言葉をかえると牛の尊厳は、人間が与えたのではなく、本来人間が奪うことができないものだとして主人公は直感的に感じ取っている。牛たちの商品価値がなくなってもそれは人間が決めたことであり、今日の前で生きている牛たちの姿から主人公が受け取るのは、牛の命の重さであり、牛飼いとしてみんなの命を守るために働こうという決意が主人公を突き動かしている。

このように、近代文明のただ中での闘いにおいて、私たちは誰かに自分の尊厳を守ってもらうことはできない。自分自身の「内なる声」の招きに誠実に応えて歩む。その道は、安易な、「楽な方」ではなくて「無私 self-less」の方向への、自分自身の弱さを越えての前進という終わりのない闘いである。ガンディー自身がその先達である。全く希望を打ち砕かれた絶望的な闘いの中に本当の希望が与えられるのであり、真の希望は人間が作り出したものではない。ただ、ただ、与えられるものである。⁴⁸⁾

スワラージは一人一人の心から始まる。その招きに応えようとする闘いから次なる一歩が与えられる。One step is enough.

註

- 1) Communalism とは南アジアにおいて宗教的アイデンティティを政治的に利用したイデオロギーである。インド人歴史学者ビバン・チャンドラによると、コミュニナリズムは近代的な問題であり、イギリス植民地支配からの脱却を目指すナショナリズムと同時に深刻化した。ナショナリズムを分断し弱体化するためにイギリス支配によって巧妙に利用され、促進された。コミュニナリズムについてのチャンドラの見解は『近代インドの歴史』（粟屋利江訳、山川出版社、2001年）のなかで特に第十章「新生インドの成長」の中の「宗派主義（コミュニナリズム）の台頭」（260-272頁）に詳しい。
- 2) この分離独立の悲劇を経験者から聞きまとめた貴重な資料として Urvashi Butalia, *The Other Side of Silence -- Voices from the Partition of India* (Hurst & Co., 2000)、ウルワシー・ブターリア著／藤岡恵美子訳『沈黙の向こう側——インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声』（明石書店、

2002年)をあげておきたい。分離独立は歴史上の出来事として終わっていない、という重さを知る手がかりとなる。

- 3) 最晩年のガンディーの愛唱歌は、詩聖ラビンドラナート・タゴールの「ただ一人歩めよ」であった。"Walk alone. If they answer not to thy call, Walk alone." (Rabindranath Tagore)。インドの独立を目指して共に行動してきたインド国民会議派の指導者たちもイギリスからの権力委譲 (Transfer of power) が実現に近づくとガンディーとは全く別の道を歩み始め、分離独立を受諾したのだった。
- 4) インドを代表する知識人であるアシス・ナンディーはガンディーの暗殺者 N. V. ゴドセが極めて理知的に近代国家のために自らの義務として暗殺を実施したことを指摘し、ゴドセは狂人ではなかったと分析している。Ashis Nandy, "Final Encounter, The Politics of the Assassination of Gandhi," *At the Edge of Psychology, Essays in Politics and Culture* (New Delhi: Oxford University Press, 1980).
- 5) 例えば、最近日本で出版された C・ダグラス・ラミス『ガンジーの危険な平和憲法案』(集英社新書 0505A、2009年)にこの点について論じられている。
- 6) 国際基督教大学に3回にわたって招かれて教鞭を取られたインドの社会学者 A. K. サラン教授 (1922-2003) の指摘は痛烈である。A. K. Saran, "Gandhi's Theory of Society" (originally published in *Studies in Comparative Religion*, 3 (4, 1969) reproduced as Chapter 16 of *Sociology at the University of Lucknow, The First Half Century (1921-1975)*, edited by T. N. Madan (New Delhi: Oxford University Press, 2013), 320. この本の Part Four, "Introductory Remarks" にサラン教授の独自の立場についての紹介がある。サラン教授と ICU の関りについては、Ayako Uno, "Professor A.K. Saran and the 'Illumination School' in Japan," from Ramesh Chandra Tewari ed., *Towards Metanoia—Essays presented to A.K. Saran on his Eightieth Birthday* (Lucknow: Coomaraswamy Centre, 2002), 493-515.
- 7) ガンディーの秘書であったマハデブ・デサイ氏の息子でガンディーのひざもとで育ったナラヤン・デサイ氏は、グジャラート州でガンディー思想に基盤をおいた平和運動を展開してきた。また、2007年に来日したスندگانルール・バフグナー夫妻は北インドのヒマラヤ地方における環境保護運動を展開してきた。バフグナー氏を初めとした現代インドにおけるガンディー主義運動については石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動——ガンディー主義と〈つながり〉の政治』(昭和堂、2011年)を参照のこと。バフグナー夫妻の ICU 訪問については、石坂晋哉「グローバル化の現代インドとガンディー主義」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』別冊 17号 2008年、77-96頁、特にバフグナーさんの日本の若者へのメッセージとして、Sunderlal Bahuguna "Message from Our Experiences from the Chipko Movement and the Anti Tehri Dam Movement" 『アジア文化研究』別冊 17号 97-106頁を参照のこと。
- 8) この点については ICU 名誉教授である葛西實教授が繰り返し指摘している。たとえば最近では「インドのビジョンと祈り——M・K・ガンディーの証言」(第62回ガンディー殉難会集會記念講演の記録)『サルボダヤ』日印サルボダヤ交友会、2010年2-3月合併号、8-15頁。
- 9) 「正気の声」という表現は A. K. サラン教授が使っている ("Gandhi's Theory of Society," *ibid.*, 316. "Has the voice of sanity any chance at all against the dark demonic powers of our times?")。
- 10) 現在私は葛西實教授と共に ICU ガンディー研究会を開催し、ナラヤン・デサイ氏のガンディー伝を読んでいるが、その伝記を貫いているのはガンディーの「私の生涯が私のメッセージです」という発言であり、そしてその生涯を真摯に受けとめようということで四巻全体のタイトルとなっている。Narayan Desai, *My Life is My Message* in 4 volumes (translated from Gujarati by

- Tridip Suhrud, Orient BlackSwan, 2009)。今回の研究発表はこのデサイ氏の伝記によって学びつつあることを踏まえて準備された。
- 11) 英文では一つの目標であることが次のように明らかである。“What I want to achieve——what I have been striving and pining to achieve these thirty years —— is self-realization, to see God face to face, to attain *moksha*.” M. K. Gandhi, *Autobiography or The Story of My Experiments with Truth*, originally published 1927, 1929 in 2 volumes (Penguin Edition, 1982) “Introduction,” 14. 『ガンジー自叙伝』「はしがき」(蠟山芳郎訳、世界の名著シリーズ、中央公論社)。また、グジャラート語からの翻訳も貴重な労作が出ている。M. K. ガンディー／田中敏雄訳注『ガンディー自叙伝 1・2 真理へと近づくさまざまな実験』平凡社東洋文庫 671-2、2000 年。以下、蠟山訳を用いる。
 - 12) ガンディーを巡礼者としてのイメージを描いている論文として、N. K. Bose, “Gandhi and Lenin,” *Studies in Gandhism* (Ahmedabad : Navajivan Publishing House, 1972) 302 を特にあげたい。
 - 13) *Autobiography* “Farewell” 『ガンジー自叙伝』「別れの辞」378 頁。
 - 14) 葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』22 号 1996 年、195 頁。リチャード・アッテンボロー監督の映画『ガンジー』(1982 年) もその出来事が冒頭に印象的に描いている。
 - 15) Narayan Desai, *My Life is My Message, Vol.1 Sadhana (1869-1915)* の 第 15 章 “The Most Creative Experience” で詳しくこの出来事の意味の重要性について検討している。特に 115 頁では “The experience of the night and the following day had given Gandhiji a new birth. That day Gandhiji became twice-born.” と述べている。
 - 16) ガンディー自身この出来事について自叙伝で述べている。自叙伝第 3 部 20 章「プレトリアへ」、 “On the Way to Pretoria,” *Autobiography* (Penguin Edition) Part 2 Ch.8, 111-112.
 - 17) 葛西實「M.K. ガンディーと南アフリカ」194 頁。「私は誰であるか? Who am I?」という autological question が伝統としてのヒンドゥー教の出発点であるということはサラン教授から教えられ、以来その意味を私自身 20 年以上考えている。サラン教授の 80 才を祝う本に葛西教授が寄せた論考に、この問いについてサラン教授との対話を通して学んだことを述べている。Minoru Kasai, “With God, With Heaven-Earth and With the People: Discovery of Givenness of Reality,” Ramesh Chandra Tewari ed., *Towards Metanoia—Essays presented to A.K. Saran on his Eightieth Birthday* (Lucknow: Coomaraswamy Centre, 2002), 22-35. 特に “II A Note on the Autological Question,” (pp.25-33) において葛西教授はサラン教授自身のこの問いの理解の深まりについて検討している。
 - 18) 葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」195-6 頁。
 - 19) ナラヤン・デサイ氏のガンディー伝には真理に向かった歩みが大きな変革をもたらしたことを描いているが、デサイ氏は四巻にわたるガンディー伝の第一巻のタイトルを “*Sadhana*” (修行の道の意味) としているが、そのなかでも特に第 30 章 “*Sadhana*”(pp.280-291) において南アフリカでの 20 年間でガンディーとその家族や共同体にもたらした変革を焦点としている。
 - 20) ガンディーが南アフリカでの活動について詳しく語っている『南アフリカでのサッティヤークラハの歴史』の「終わりに」においてガンディーは南アフリカでの生活について、「二十一年滞在し、数限りない苦く、また心地好い経験をしましたし、またこの地で私は自分自身の人生の目的を知ることができたのです。」と述べている。M. K. ガンディー／田中敏雄訳注『南アフリカでのサッティヤークラハの歴史 2 非暴力不服従運動の展開』平凡社東洋文庫 738、2005 年、216 頁。

- 21) 『ガンジー自叙伝』「はしがき」68-71 頁。
- 22) N. K. Bose, "Gandhi and Lenin," 303-305. また A. K. Saran, "Gandhi and the Concept of Politics," *Gandhi Marg*, vol.1 No.11, February, 1980 (New Delhi: Gandhi Peace Foundation), 675-726 の注 22 (pp.716-7) にガンディーが愛唱していたニューマンの賛美歌の一節 "One step enough for me" についての文章を紹介している。(1934 年 4 月 20 日『ハリジャン』誌より)
- 23) 南アフリカでガンディーと共に生活し、友情を結んだ西洋人としてヘンリー・ボラクやハーマン・カレンバッハ、ガンディーの最初の伝記を書いたジョセフ・ドーク、そして最終局面で大きな助力を与え、終生の友人となったチャールズ・F・アンドルウズなどお互いに大きな影響を与えあう存在であった。
- 24) サッティヤーグラハ運動は 1906 年 9 月 11 日に誕生した。デサイ氏はガンディー伝の第 45 章 "Satyagraha: The Birth," (pp.488-514) に詳しく取りあげている。*Satyagraha* は、真理 (サッティヤ) をしっかりとつかむこと (アグラハ) という二つのサンスクリット語からガンディーたちが作った新しい言葉である。インド人たちは最初この運動を当時の西欧社会で使われていた受動的抵抗 (passive resistance) と呼んでいたが、内実が全く違って誤解を招くので、新しい言葉の提案を募集したのだった。ガンディーは南アフリカでの実験をもとに、インドでスワラージ (自治、自立、自由) をすべての人々に実現するためにサッティヤーグラハを各自が実践することへと招いていた。
- 25) M. K. Gandhi, *Hind Swaraj or Indian Home Rule* (Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1938, originally published in 1909). 比較的日本で手軽に入手できるものとして、グジャラート語からの翻訳版『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』(M. K. ガンディー／田中敏雄訳、岩波文庫青 261-2、2001 年) がある。英語では、近年の研究や詳しい解説を踏まえたものとして、A. J. Parel ed., *Hind Swaraj and other Writings* (Cambridge Univ. Press, 1997) がある。その他、『ヒンド・スワラージ』を日本の一般読者に紹介したものとして、長崎暢子「ガンディー『ヒンドゥー・スワラージ』」『現代アジア論の名著』(中公新書 1093、1992 年) や長崎暢子『ガンディー、反近代の実験』(現代アジアの肖像 8、岩波書店、1996 年) 第五章「『ヒンドゥー・スワラージ』ガンディーのインド独立構想」があげられる。
- 26) Desai, *op. cit.*, Chapter 40 "Hind Swaraj," 408-426 など参照のこと。
- 27) 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』第 8 章「インドの状態」49 頁。以下、田中敏雄訳を用いて紹介する。A. K. Saran, "Gandhi and the Concept of Politics," 692 には "Gandhi's anti-imperialism was thus a magnificent protest against the soullessness of modern (Western) civilization." とある。
- 28) 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』第 8 章「インドの状態」49 頁。
- 29) 同上、49 頁。
- 30) 同上、38-40 頁。(第 6 章「文明の哲学」)
- 31) 同上、41 頁。(第 6 章「文明の哲学」)
- 32) 同上、43 頁。(第 7 章「インドはなぜ減んだのか」)
- 33) 同上、47 頁。(第 7 章「インドはなぜ減んだのか」)
- 34) 同上、81 頁。(第 13 章「真の文明とは何か」)
- 35) 同上、81 頁。(第 13 章「真の文明とは何か」)
- 36) 同上、85 頁。(第 13 章「真の文明とは何か」)。ここでの西洋文明とは、近代文明のことである。
- 37) 同上、51 頁。(第 8 章「インドの状態」)

- 38) 同上、49頁。(第8章「インドの状態」)
- 39) NPO法人「懐かしい未来」はラダックの伝統と近代化について研究したヘレナ・ノーバグ＝ホッジの著作 *Ancient Futures* (1992, 邦題『ラダック 懐かしい未来』2003年) にインスピレーションを受けて始まった。ローカライゼーションやトランジットタウンなどの運動が日本と世界各地とつながりながら展開していくことをサポートしている。
- 40) マハトマ・ガンディー (浅井幹雄監修) 『ガンディー、魂の言葉』(太田出版、2011年)、エクナット・イーシュワラン／スタイナー紀美子訳『人間ガンディー 世界を変えた自己変革』(東方出版、2013年)、山折哲雄『母なるガンディー』(潮出版社、2013年)などが東日本大震災以降出版されている一般読者向けの本である。
- 41) 森絵都作、吉田尚令絵『希望の牧場』(岩崎書店、2014年、協力：希望の牧場・ふくしま代表吉沢正巳)。
- 42) 『希望の牧場』17頁より。
- 43) 『希望の牧場』最後の頁より。
- 44) 絵本の絵を担当した森絵都さんの言葉が絵本の帯に紹介されているが、それは「闘いつづける『希望の牧場』のすがたを、『悲しみ』ではなく『強さ』をこめて絵本に残せたらと考えました」とある。
- 45) 『ガンジー自叙伝』「別れの辞」378-9頁。
- 46) トゥルシーダース (1532-1623) は中世インドの代表的詩人。民衆の言葉でラーマの物語を書いた『ラーム・チャリット・マーナス』は今日まで「北インドの民衆の聖書」として広く歌われ続けている。森本達雄『ヒンドゥー教——インドの聖と俗』、中公新書1707、2003年、308-9頁。
- 47) 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』第17章「サッティヤーグラハ—魂の力」109頁。
- 48) 葛西實教授はサラン教授との長年の対話を通じて、Giveness of Reality への意識が生まれたことを深く感謝して述べている。Minoru Kasai, “With God, With Heaven-Earth and With the People—Discovery of Giveness of Reality.” この意識を再発見することこそが新たな出発点となるのではないかと思う。